

「飲み込む龍」と通過儀礼

——ヨーロッパの図像における「死と再生」の概念について——

溝 井 裕 一

The “Swallowing Dragon” and Rites of Passage About the Notion of “Death and Rebirth” in European Pictures

Yuichi Mizoi

Since ancient times in Europe, stories have been told about heroes, gods and saints who fought with dragons. While many of them faced monsters and killed them, there are some stories of heroes and heroines who were swallowed by a dragon, killed it from inside, and emerged unhurt from its body. Some of the pictures and legends from the ancient or medieval times tell about those dragon-slayers. For example, according to a picture on a vase of the 5th century B.C., the famous Greek hero Jason was swallowed apparently by a dragon and came out again of its mouth. A legend also tells that the Irish hero Fionn Mac Cumhail entered the body of a dragon and killed it from inside. We can also find the similar motif in the medieval paintings and the legend of St. Margaret.

The meaning of those pictures and legends seems difficult to understand. I analyzed the motif of the “swallowing dragon” by applying it to the scheme of rites de passage. According to Arnold van Gennep, the rites of passage consist of three steps – separation, transition, and incorporation. It is also said that they symbolize the death and rebirth of a person who moves from one state to another. I viewed that the motif of the “swallowing dragon” represents the death and rebirth at the rites of passage of heroes or saints.

At the beginning of the article, the pictures and stories of the “swallowing

dragon” are presented. After that, I will compare the European “swallowing dragon” stories with the notion of the “swallowing animals” in other countries (they appear at the initiation of Siberian and Eskimo shamans as well as the people of New Guinea) and examine the analogy between them. Then, I will apply the Genneps schema to “swallowing dragon” stories and consider whether we can count them among the rites of passage. With the results from those studies, I will clarify the notion of death and rebirth in the European pictures, myths and legends.

はじめに

龍は、世界の神話や伝承に欠かせない存在として、古くから好まれてきた生き物である。古代ヨーロッパにおいては英雄や神々が龍と戦っていたし、キリスト教が流入して後は、龍は様々な聖人たちとも戦うようになった。それゆえ西洋の龍は、東洋の場合と異なり、ネガティブな存在であったといわれることが多い。

しかしながら、ヨーロッパの人びとにとって龍が歴史的にひたすら悪の存在であったのかというと、それには疑問が残る。昔から伝わる図像や伝承をつぶさに観察していくと、ヨーロッパの龍は——本稿ではとくに伝承の主人公を飲み込んでしまう怪物たちをとりあげているが——実は死と破壊を呼ぶ生き物であったのみならず、死後の再生にも欠かせない生き物であったことが推察されるのである。このことは、神話や聖人伝における龍退治を、通過儀礼に位置づけて分析することで明らかになると思われる。

通過儀礼は、人びとが人生においてひとつの状態から新しい状態に移ってゆくときに体験する、象徴的な「死と再生」を意味するものであるとされる。それゆえ数々の神話や伝承で語られてきた龍退治のモチーフを、通過儀礼として眺めるということは、古来ヨーロッパの人びとがいかにして「死と再生」の意味をとらえ、それと向き合ってきたのかを知る上で有益なことであるといえよう。これはまたさらに、ヨーロッパ以外の地域の人びとが持つ死生観との共通点や相違点を探る上でも役立つにちがいない。

だが、龍退治を通過儀礼という視点から分析する前提として、通過儀礼とはそもそも何であるのか、概念の考察が必要になるであろう。

I. 通過儀礼とは何か

通過儀礼という概念は、アルノルド・ヴァン・ジュネップ (ファン・ヘネップ) が20世紀初

頭に初めて示したもので、人間が誕生、結婚、死など、様々な人生の転換期を迎えるときに経験する儀礼のことを意味している。ジュネップの図式によれば、通過儀礼は「分離、移行、合体」という3つの段階から成り立つという¹⁾。この図式について、エドワード・ノーベックは「儀礼の中心となる人間（もしくは人間たち）は、まず象徴的に彼の古い階級から引き離され、それから移行の段階をとおして新しい階級のための調整を受け、最後に彼の新しい社会階級の共同体に再編入される」²⁾と分かりやすく解説している。

ジュネップによれば、通過儀礼は個人や社会だけでなく、自然のリズムに関連した祭礼にも見出せるものである。少し長いですが、通過儀礼の定義にも深くかかわることなので引用してみよう。

グループからグループへ、またある社会状態から次の状態への移行は、存在にかかわる明白な事実において絶対的なものと見なされる。それゆえに人の生活は、似たような終わりとはまりをとともなう段階の連続によって成り立っているのである：誕生、社会的思春期、結婚、父になること、より上のクラスへの昇進、職業の専門化、そして死というぐあいに。こうした出来事のどれにおいても儀式がともなうが、その本質的な目的は個人がある限定されたポジションから、同じく限定されたポジションへと移ることを可能にすることなのである。ゴールは同じなのであるから、必然的にそのゴールへ到達する経緯も、細かいところまでは同一でなかったとしても、少なくとも類似することになる（どんなケースでも、関与する人物はそれぞれの段階を経て、それぞれの境界線を越えることによって変化するのだから）。

したがって、我々は誕生、子供時代、社会的思春期、婚約、結婚、妊娠、父になること、宗教団体へ入るためのイニシエーション、そして埋葬などの儀式における一般的な類似性の幅広さに直面する。この点において人生は自然に類似しており、個人も社会も自然から独立してはいない。宇宙それ自体、段階と移行、前進とそれに関連した休止の期間などで、人の生活に影響を与える周期性によって支配されている。それゆえ人の通過儀礼には、月から月への転換（満月祭）、季節から季節への転換（至点や分点に関連した祭り）、年から年への転換といった天上の変化に起因する儀礼をも含めねばならないのである³⁾。

このように、通過儀礼は個人的な人生の節目の行事のみならず、社会的イニシエーションや宇宙的自然現象にまで拡大して考察されうるものであるが、それに加えて、新しい状態へ入る

ために必要とされる象徴的な「死と再生」が、様々な通過儀礼におけるシンボリズムの普遍的形態であるとされている⁴⁾。だが「死と再生」というのは、抽象的な死とそこからの再生だけにとどまらない。人びとが死後も生を得ることができると信じていた場合、「死と再生」は現実の死にもあてはまるものである。本稿では、「死と再生」は「飲み込む龍」のモチーフを分析する上でとりわけ重要な意味をおびてくるであろう。

それでは次章から、ジュネップの通過儀礼の概念を援用しながら、本格的な考察に入ってゆきたい。

II. ヨーロッパにおける龍伝承と奇怪な図像

II-1. ヨーロッパの伝承における龍退治

昔からヨーロッパで語られてきた伝承の大半において、龍は神々や英雄、聖人などに最終的に敗北して殺されるか、相打ちになるのが常である。

例えばギリシア神話では、様々な形の龍退治が物語られており、主神ゼウスはテュポーンという怪物と戦う。また怪力のヘラクレスは沼沢地に棲む9つの頭を持つ大蛇を打ち負かし、勇者ペルセウスはアンドロメダという乙女を海の怪物から救い出す。カドモスは泉に棲む龍によって部下を殺されたが、「これに怒ったカドモスは龍を殺し、それからアテネの助言にしたがってその歯を播いた」⁵⁾。そのとき、播かれた歯によって戦士たちが地中から現れたものの、彼はそれも策を用いて打ち負かす。

ゲルマンの世界でも同様な龍との闘いの傾向が見られる。9-13世紀にアイスランドで書かれたとされる『韻文エッダ』では、英雄シグルド（ジークフリート）が龍を倒し、その心臓の血をなめることによって鳥の言葉を理解するという能力を手に入れる⁶⁾。また「ラグナロク」という世界終末の話では、トール神がミドガルドという大蛇と戦って相打ちして果てる様子も描かれている⁷⁾。

シグルドの龍退治は、中世文学である『ニーベルンゲンの歌』でも語られており、「彼はその強靱な腕でもって、1匹の龍を殺した。その血を浴びることで、彼の肌はべっ甲のようになった」⁸⁾と歌われている。

他の中世の英雄文学でも、龍退治は大変好まれたモチーフであるが、ルッツ・レーリッヒは「1200年ごろの時代には、ほとんどすべての英雄が少なくとも1匹の龍を殺さねばならなかった」⁹⁾と述べている。まさに龍退治は当時、英雄になるための「通過儀礼」であったといえる。

キリスト教の聖人たちもまた、龍と頻繁に戦っている。カトリック教会は全部で60もの龍

と戦う聖人を有するというが¹⁰⁾、そのなかでももっとも有名なのは聖ゲオルギウス（聖ジョージ）の龍退治であろう。

ジェノバの大司教が13世紀に書いた『黄金聖人伝』によると、カッパドキア出身のゲオルギウスがシレナという町にやってきたとき、そこでは悪龍が暴れまわっていた。この龍をなだめるためにすでに多くの若者が生贄に捧げられており、王女にもその番が回ってきていた。しかし、たまたまそれに居合わせたゲオルギウスは「お嬢様、恐れなくてください。私があなをキリストの名においてお助けいたします」¹¹⁾ といって龍を退治し、その後町の人びとにキリスト教の洗礼を受けさせたという。

この他にも『黄金聖人伝』のなかでは、龍退治をする聖女や聖人の伝説が語られている。例えば聖女マルタは、タラスクという名の龍によって苦しめられているフランスの町を開放する。彼女は森にいる龍に聖水をかけておとなしくさせ、腰帯で縛って村人に殺させたという（ちなみにこのエピソードは、現在のタラスク祭の起源とされている）¹²⁾。

さらに、聖シルヴェステルにまつわる伝説は興味深いものである。彼は、洞窟に棲み、毒気によって住民を殺している龍に向かって、「処女からお生まれになり、十字架にかけられ、埋められ、復活して父なる神の右手にお座りになった我らの主イエス・キリストは、生者と死者を裁くためにやってこられるであろう。それゆえにおまえ、悪魔よ、彼が来るまでこの穴のなかで待っているがよい」¹³⁾ と語り、その口を縛ったという。ちなみにシルヴェステルの祭日は大晦日（ドイツ語でいうジルヴェスター）であり、それゆえ彼は新しい年に生をもたらす者という役割を担っている。したがってこの話には、「死と再生」のモチーフが潜んでいるといえよう。

以上の龍にかかわる英雄や聖人の大半は、雄々しく怪物に立ち向かう様で語られており、我々にも馴染み深いものである。ところが、英雄や聖人が龍に飲み込まれてしまい、またそこから出てくるという一風変わった龍退治の様子が語られることもあった。

II-2. 「飲み込む龍」の奇妙な図像

英雄や聖人たちを飲み込む龍の図像や伝承というのは、あまり数は多くないが、きわめて強い印象を与えるものである。例えば紀元前5世紀作とされる、イアソンと龍（もしくは大蛇）の壺絵には異様な光景が描かれており、彼の上半身だけが龍の顎から突き出ている（図1）。

この図からは、彼が龍に飲み込まれようとしているところなのか、あるいは顎から出てこようとしているのか判別しにくい。だがおそらく、図像の光景はその両方を暗示するためにこのような形で描かれたと解釈するのが妥当であろう。



図1：イアソンと「飲み込む龍」

1-2世紀に書かれた『ギリシア神話』によれば、イアソンは、イオルコスを治めていたクレテウス王の孫であったが、彼の生きていた時代、この土地はペリアスという王によって支配されていた。だがペリアスは、自分がやがてイアソンによって殺されるだろうという神託を受ける。そこで彼はイアソンに、龍が守る金羊毛皮を獲得するという使命を負わせて死に追いやろうとした。しかしメディアという女魔法使いがイアソンを助け、龍に薬をもって眠らせたので、彼は難なく毛皮を手に入れることができたという¹⁴⁾。この話は、紀元前3世紀の叙事詩人アポロニオスの『アルゴナウティカ』でも語られていて、メディアが歌と薬で龍を眠らせているあいだに、イアソンは金羊毛皮を盗む¹⁵⁾。

ところがこの英雄にまつわる古代ギリシアの図像は、彼の冒険がそう簡単なものではなかったことを伝えている。むしろイアソンの物語に関しては『ギリシア神話』に書かれたもの以外のバリエーションが存在した。例えば彼の龍との対峙の場面について、ロビン・ハードが次のように述べている。

このアポロニウスのバージョンでは（これは紀元前5世紀の詩である、コロフォンのアンティマクスによる似たような報告に基礎を置いているのかもしれないが）、イアソンによる毛皮の窃盗は、英雄的偉業としてはほとんど位置づけられないようなもの

のである；しかしそれ以前の伝承においては、ピンダーやフェレシデスが証言したように、イアソンは怪物殺しの英雄のやり方で龍に立ち向かい、（疑いなく彼の剣によって）殺した。[図1と同じ] 視覚的イメージ（もっとも古い年代推定では紀元前425年のものとされる）によってのみ知られている、印象深い別の話においては、イアソンは龍に飲み込まれたあとで、内側からそれを殺したようである¹⁶⁾。

「飲み込む龍」から生還するという話はさらに、島嶼ケルトの伝承においても見出せる。アイルランドの英雄フィン・マク・クウィルとその仲間が龍と戦ったと伝えられるが、その怪物は山ほども大きさがあつた。だが「この龍もフィンと騎士たちにはかなわなかつた。龍はなるほど皆を丸飲みにはできたのであるが、フィンはたちまちにして自分の剣で龍の腹を中から切り開いてぴよんと飛び出したのである。他の騎士たちも後から続いてぴよんぴよん飛び出してきた」¹⁷⁾。フィンというのはフィアナと呼ばれる戦士団を率いた伝承上の英雄のことで、ベルンハルト・マイアーによると彼のモチーフはシグルド伝承とも関連性があるという¹⁸⁾。

またヨーロッパでは中世においても、イアソンやフィンのもによく似た「飲み込む龍」のモチーフを見出すことができる。例をあげると、15世紀に北フランスで描かれた聖女・アンティオキアのマルガレタ（マルガリタ）の図像では、聖女が自分を飲み込んだ龍の背中を突き破って、体の上半身を突き出している。このマルガレタは十字架を握っており、破られた龍の体からは血が流れている。さらに龍の口からは彼女の衣服の一部がはみ出しており、龍が彼女を飲み込もうとしたことが示されている（図2）。

『黄金聖人伝』によれば、聖女マルガレタは彼女からキリスト教の信仰を奪おうとしたアンティオキアの総督により拷問を受けた娘である。彼女に対する「異教徒」の拷問は凄惨を極めたが、総督はいったん彼女を牢に戻すよう命ずる。それから先は以下のとおりである。

マルガレタは下ろされて拘置所に戻されたが、そこで不思議な光が彼女の周りで輝いた。その場で彼女は主に向かって、自分の戦っている敵を見せるよう祈ると、恐ろしい龍が現れた。しかしこの獣が彼女をむさぼり食おうとやってきたとき、彼女が十字の印を作るとそれは消えてしまった。あるいは、我々がどこかよそで読んだところでは、龍は彼女の頭の上で口を開き、彼女の足もとへ舌をのばしてひと息で飲み込んでしまった。しかしそれが彼女を消化しようと試みていたとき、彼女は十字の印で自らを守り、十字の力によって龍は破裂して、処女は無傷で出てきた¹⁹⁾。



図2：龍の背中から上半身を出すマルガレタ

なお、このあとで『黄金聖人伝』の著者は、マルガレタが龍に飲み込まれたという話は信頼すべきでないと語っている。しかし上にあげたマルガレタの図が、この話をもとにして描かれたものであることは間違いない。さらに、マルガレタが体内から龍を突き破っている様子は、12世紀のスペインのテンペラ画や13世紀の北フランスの写本にも表現されている（図3、図4）。またデイヴィッド・ヒュー・ファーナーによれば、「優に200以上の古いイングランドの教会が彼女〔マルガレーテ〕に捧げられており、そのうち58はノーフォークにある。彼女はよく壁画や窓のステンドグラスに描かれているが、しばしば龍を槍で突き刺したり、その体内から無傷で現れたりしている」²⁰⁾という。こうしたことから、マルガレタと「飲み込む龍」のモチーフはヨーロッパの国々で人気のあるものだったことがわかる。

またマルガレタに似た姿で描かれた人物に、旧約聖書のヨナがいる。彼は自分の神から逃げ出そうとしたために、大魚によって飲み込まれたと伝えられる人物で²¹⁾、14世紀のラテン語聖書において巨大な魚の口から体を突き出した格好で描かれている²²⁾。

このようにヨーロッパでは、主人公たちを飲み込む龍、もしくは巨大な動物に関する図像や伝承が残されている。これは、ヨーロッパにおいても龍が単なる敵役以上の意味を持っていたことを暗示する貴重な証拠であるといえるが、このモチーフを通過儀礼の図式と比較しながら考察することによって、そこに隠された意味を読み解くことができるであろう。



図3：聖女マルガレタ(左)。12世紀スペインのテンペラ画
 図4：聖女マルガレタ(右)。北フランスの13世紀の写本より



Ⅲ. 通過儀礼と「飲み込む動物」たち

Ⅲ-1. 様々なイニシエーションに現れる「飲み込む動物」たち

ヨーロッパにおける、自らを飲み込んだ龍を克服する英雄や聖人の伝承は、これだけを眺めていては単なる荒唐無稽な物語にすぎず、その意味について考察するのは困難である。だが視野を広げると、「飲み込む動物」のモチーフがヨーロッパ以外の国々でも見られ、しかもそれが様々な通過儀礼に結びつけられていることがわかる。

例えば「飲み込む動物」たちに、とくに深くかかわっている人びとにシャーマンたちがいる。シャーマンというのは、霊的世界と人間世界のあいだの橋渡しをする専門家のことで、エクスタシー状態に陥って様々な霊と交渉することで知られる。彼らは現在も、シベリア・モンゴル地方や南北アメリカをはじめとして世界に広く分布している。

シャーマンたちは通常、その特別な力を身につけるためにイニシエーションを受けなければならない。シャーマンの候補者は、イニシエーションの際にトランス状態に陥って、魂の状態地下世界へ下りてゆき、そこで現れた霊によってバラバラにされ、また組み立てられるという経験をすることが多いが、そのとき彼が霊たちによって「食われる」という体験をすることもあるという。ミルチア・エリアーデが紹介したヤクート族のシャーマンのイニシエーション体験を以下に引用してみよう。

ヤクート族のガブリール・アレクセイエフは、それぞれのシャーマンがバード・オブ・プレイ・マザー猛禽母を有していると語っているが、それは鉄の嘴、鉤爪、そして長い尾を持った大鳥のような姿をしている。この神話的な鳥はたったの2回しか現れない：シャーマンが精神的に目覚めたときと、死ぬときである。それは彼の魂をとって地下世界へと運んでゆき、成熟させるために樹脂松の枝に置く。魂が成熟したとき、鳥は地上へと連れ戻し、候補者の体を小片に刻んで、病と死の邪悪な霊たちに与える。それぞれの霊たちは、各自が分担する体の一部をむさぼり食う；これは未来のシャーマンに、[それぞれの霊に]相当する病を治療する力を与える。体全身を平らげたあと、邪霊たちは去ってゆく。バード・マザーが骨をもとの位置に戻すと、候補者は深い眠りに落ちていたかのように目覚める²³⁾。

またエスキモーのシャーマン候補生がイニシエーションを受ける際には、彼は老シャーマンにこういわれたという。

それから湖か内陸の氷河の熊がやってきて、おまえのすべての肉を食らい、骨だけにするが、それでおまえは死ぬだろう。しかしおまえが自分の肉をとり戻して目覚めれば、着物がおまえのもとへ急いでやってくるだろう²⁴⁾。

これらの神秘的な体験は、動物に食われて骨だけにされることによって死に、そのあとまた肉をつけられて蘇るという「死と再生」にかかわるものである。またシャーマンのイニシエーションは「分離、移行、統合」という通過儀礼の図式に相当するものであり、ジュネップもこれについては彼の著書で触れている²⁵⁾。

むろん、シャーマンのイニシエーションには様々な種類があつて、人間の霊によって切り刻まれたり、大釜で煮られたりといったバリエーションもあることは、ここで触れておかねばならない。動物に食べられることだけがシャーマンのイニシエーション体験ではないのである。

さらに、こうしたシャーマンの体験に加えて、南太平洋における通過儀礼にも「飲み込む怪物」が現れることを指摘しておかねばならない。マンフレート・ルルカーはこう述べている。「ニューギニアには、割礼を受けた子供をむさぼり食い、それからまた吐き出す獣に関する観念がある。イニシエーションの実際の経緯に精通している男たちは、飲み込む霊のことを恐ろしい(部分的に龍に似た)怪物として女たちに描写する。」²⁶⁾ この儀礼においても、人間を飲み込もうとする獣が重要視されており、さらにシャーマンのイニシエーションと同様、子供が

「食われ、また吐き出される」のを体験することが期待されているのがわかる。

こうした通過儀礼やシャーマンのイニシエーションには、「死と再生」の体験が色濃く反映されていることはまちがいない。また彼らの体験には動物がかかわっているのも、注目に値することである。そしてこうしたイニシエーション体験が、ヨーロッパで描かれた「飲み込む龍」の図像の意味を解き明かすひとつの鍵になると私は考えるのである。

もっとも「動物に食われる」という体験が他の地域に見られるからといって、それをそのまま、古代から中世までにヨーロッパで描かれた「飲み込む龍」の図像解釈にあてはめることは問題があるだろう。これまで紹介した話は、いずれもヨーロッパから遠い文化圏に関して語られていることだからである。

それゆえ次からは、ヨーロッパ史上で常に重要な役割を果たしてきた「死と再生」に対する信仰をとりあげ、そこに上述した通過儀礼と同じ傾向が見られるかどうかを検証したい。そしてそれを踏まえた上で、伝承や図像における「飲み込む龍」の最終的な解釈に入りたいと思う。

Ⅲ-2. ヨーロッパにおけるイニシエーション的「死と再生」

ここまで我々は、世界の様々な地域における「飲み込む動物」の通過儀礼を見てきた。だが、ヨーロッパの人びとも「飲み込む動物」に遭遇し、「死と再生」を経験するということがありえたのであろうか。

この考察を進める前に、やや遠回りと思われるかもしれないが、まずは古代のケルト人やゲルマン人の死生観と、それに関係する地下世界への信仰について見ておきたい。というのも、これがヨーロッパにおける「飲み込む龍」について考えるときに大きな意味を持つからである。

ケルト人は、「死と再生」を熱心に信じた人びとであったといわれるが、その死生観について、ヤン・デ・フリースはゲルマンの死生観と関連づけてこう解説している。

私が信ずるに、様々なインド・ゲルマン民族における死に関する考え方は、根本的には異なっていなかった。それゆえ我々は、我々がよりよく知っているゲルマン人の靈魂信仰を、比較のために引き合いに出すことが許されるであろう。彼らは、魂が氏族内で生まれ変わると考えていた。死者は地下世界へ下りてゆくが、そこで永遠に過ごすわけではなかった。彼は熱望する地上生活への帰還を待っていたのである。彼の氏族内で新しい子供が生まれれば、そのときがやってきた；そうすれば彼は戻って、氏族内で新しい人生のために再生することが許されたのだ。ときどき明るみになる、[祖先と子孫の] 顔立ちや体格、心や精神的な特徴で同質な点は、この「魂の移行」

の歓迎されるべき証拠であった²⁷⁾。

ケルト人が再生を信じていたという見解は、その後の研究においても変わっていない。サイモン・ジェームズは「ケルト人は、彼らの人生をとおしておこなったことの褒章とか罰としての天国や地獄といった概念を持っていなかったらしい：死後の再生は、どうやら自動的なものと考えられていたようである」²⁸⁾と語っている。またゲルマン人に地獄という概念がもともとなかったことは、マイアーも指摘している²⁹⁾。

ケルト人やゲルマン人にとって、地下世界は地獄ではなく、再生のときを待つ場であった。そしてこうした地下世界の問題と、それに基づく死生観は、「飲み込む龍」のモチーフの意味を探る上で重要な意味をもつ。

もちろん、ケルト人やゲルマン人の「死と再生」に対する信仰は、「現実に」死者が蘇ると信じられていたことを示しているのものであって、シベリアや南太平洋におけるイニシエーション的「死と再生」とは異なる、という意見があるかもしれない。しかしそれは、シャーマンや南方の人びとの体験をどこまで真実ととらえるかによって変わってくるであろう。もし、彼らのイニシエーション体験を現実の「死と再生」と無関係なものに見なすのであれば、そこで語られる「死と再生」は抽象的な問題にすぎないことになる。

だがイニシエーション的「死と再生」は、ケルト人やゲルマン人が信じていた現実の「死後の復活」と密接な結びつきがあると考えられる。というのも彼らの信じていた死後のプロセス——死者が冥界に下り、復活の際にそこから帰ってくるという経緯——は、通過儀礼における「死と再生」のプロセスと軌を一にするからである。

さらに、シャーマン的な「死と再生」はケルト伝承においても確認できる。ピアーズ・ヴィテプスキーによれば、シベリアのシャーマンはイニシエーションの際、地下の世界で大釜で煮られるという体験をすることがあるが、その様子は次のようなものである。

まずシャーマン候補の者が地下界に下りてゆくと、彼はそこで7つのテントがあるのを目にする。彼は真ん中のテントに入るが、そこにいた「天然痘人」が彼の心臓をとり出して、大釜に放り込んで煮てしまう。このような旅が続いたあとで、彼は再び裸の男によって大釜で煮られるという体験をする。

私を見たとき、裸の男はテントほどのサイズもあるヤットコをとり出して私を捕まえた。彼は私の頭をとって切り離し、それから私の体を小片に切り刻んで大釜に入れた。そこで3年のあいだ彼は私を煮た³⁰⁾。

この後、彼の筋肉が骨からとりのぞかれるが、骨は川に流されたあと、再び裸の男によって組み立てられる。骨にはもとのように肉がつけられて、シャーマン候補者はみごと復活をとげるのである。

この、大釜で人が煮られて再生するというモチーフは、島嶼ケルトの伝承にも同様に見られる。中世ウェールズの民間伝承をまとめた『マビノギオン』の「スィールの娘ブランウェン」という話では、ブリテンの王がアイルランド人と交戦するが、そのときアイルランド軍は魔法の大釜を持っており、そこに戦死した仲間を投げ入れる。すると「翌朝になると、これらの死者たちは、[口がきけないということは除いて] 以前と同じような完全な姿で起きあがってきた」³¹⁾ という。ここで語られているのは「現実の」死者の復活だが、同時にシャーマンのイニシエーションにおける「死と再生」を想起させるものがある。

さらにギリシア神話においても、これに類似した話が存在する。「飲み込む龍」の図像でも描かれたイアソンの冒険譚では、彼の妻メディアが羊を殺してバラバラにしたあと、それを大釜で煮て骨だけにし、薬草を使ってみごと復活させるのである³²⁾。なお生き物が骨から蘇るといふ話は、ケルト人やギリシア人だけでなくゲルマン人のあいだにも見出すことができる。レーリッヒやエリアーデが指摘するように、『散文エッダ』（『スノリのエッダ』）にはトール神が「殺され、煮られ、食べてしまった」³³⁾ 山羊の骨を、皮の上に投げることで復活させたのであるのだ。

また古代ケルトの関連では、「飲み込む動物」に関して興味深い彫刻が残されている。フランスのノーヴに出土した、紀元前のものとされる「怪物」像は、両手に人間の首を持ち、口には人間の腕をくわえこんだ姿で表現されている（図5）。この見る者を戦慄させる彫刻に関して、分かっていることはほとんどないが、股に大きな男根が表現されていることから、殺戮と同時に豊穡にも結びつけられていたとの解釈もある³⁴⁾。つまりこの彫像であらわされているのは、人間をむさぼり食うと同時に生をもたらす者であり、シャーマンたちが語っていた「飲み込む動物」や南太平洋の通過儀礼に登場する怪物を連想させるのである。



図5：ケルト人による、人を食らう怪物像

これに加えて、古代ローマ帝国を通じてヨーロッパへと浸透していったキリスト教もまた「死と再生」を重視する宗教であった。キリスト教における「死後の生」を象徴するのは、もちろんイエス・キリストである。というのもキリストは、処刑されて後に復活したとされているからである。

さらにキリスト教の聖人が「死と再生」にかかわるという話もある。バーバラ・ウォーカーによれば、伝道者聖ヨハネは大釜で煮られたあと、そこから再び出てきたという³⁵⁾。

また前述したように、マルガレタによく似た「飲み込む動物」のモチーフを持つ聖書上の人物はヨナである。ヨナの飲み込まれる物語もまたやはりイニシエーション的「死と再生」を彷彿とさせるものであるが、彼が重要視されるのは、キリストの復活と平行した「死と再生」が語られているからに他ならない。ルルカーも指摘しているが、マタイ福音書には「というのもヨナは3つの昼と3つの夜を魚の腹のなかにいたので、人の子も3つの昼と3つの夜のあいだ大地のふところにいよう」³⁶⁾とある。

このように、ヨーロッパの様々な信仰において「死と再生」は常に重要なテーマであり、シャーマンや南太平洋の通過儀礼に似た「死と再生」の表現も時代をとおして存在した。そしてケルトの彫刻などが示すように、「飲み込む動物」の表現もまた見られるのである。

もちろんこうした事例があるからといって、ヨーロッパ人の宗教がシベリアのシャーマニズ

ムそのままであったとか、ヨーロッパには南太平洋の通過儀礼によく似た儀式があったとかいうのではない。おそらくイニシエーション的「死と再生」や「飲み込む動物」は多くの宗教に共通して見出される現象である。エリアーデは「相当な数の世界中の神話や伝説において、主人公は動物によってあの世へと運ばれてゆく。初心者や背中に乗せて灌木の茂み（地下世界）へ運んだり、顎にくわえこんだり、あるいは『殺して復活させる』ために『飲み込んだり』するのはいつも動物たちである」³⁷⁾と語っている。

だがここまでの検証をとおして、我々がしだいにイアソンやマルガレタの図像における、「飲み込む龍」がもつ意味に迫りつつあることは間違いないであろう。次の章からは、これまでにあげた図像だけでなく、他の龍退治のモチーフをも視野に入れつつ、そこに見られるイニシエーション的意味と「死と再生」について考察したい。

IV. 図像における「飲み込む龍」の持つ意味

IV-1. 古代ヨーロッパの図像や伝承における「飲み込む龍」と通過儀礼

ここまで見てきたように、「飲み込む動物」のモチーフは世界各地で現れる。そしてシベリアやエスキモーのシャーマンや、南太平洋の人びとがイニシエーションの際にかかわる「飲み込む動物」はごく普通の動物というよりも、霊界に属する神話的な動物という面が強い。また古代ケルト人があらわした「飲み込む怪物」の彫像も、現実にいる生き物をあらわしているというよりは、神的あるいは霊的な冥界の動物という印象を与えるものである。

だが、ヨーロッパ各地の神話や伝説で語られている龍もまた、エリアーデのいう「あの世」とかかわりをもつ点で、霊的な存在という一面をもっている。

エリアーデは、人間を「あの世」へ運んでゆく動物たちに言及した際、「あの世」とは「天空、地下もしくは水中の世界、不可侵の森、山、荒野、ジャングルなど」³⁸⁾だと語っている。そして伝承世界で龍が棲んでいるところもまた、ほとんどの場合、洞穴や水源、森、山、荒野などであり、例えばギリシア神話ではヘラクレスと戦う大蛇は沼地に、ペルセウスと戦う怪物は海に、カドモスと戦う龍は泉にいる。そしてイアソンが対峙する（殺す）龍は聖なる森のなかに棲んでいる。こうしたことはさらに『韻文エッダ』の場合も同様であって、シグルドは水のほとりで龍を殺す。とくに龍の住処とされるのは洞穴や水源の場合が多いが、これらは古代の人びとにとっては地下世界と通じる連絡路であった。

またヨーロッパの伝説においても、これと同じ傾向が見られる。例えば、ハインツ・レレケの編纂した伝説集の「いかにしてリントヴルムが殺されたか」というシュレーゲン地方の伝説では、「山 [リント山] には3本の大きな溝があった。これらの溝にはかつて、山の名前が

示しているように、1匹のリントヴルム「蛇龍」が棲んでいて、山に近づいてきた羊飼いや家畜を平らげていたが、自ら村におもむいて、そこで人びとを襲ってむさぼり食っていた³⁹⁾と語られており、また「リントヴルムたち」というテューリング地方の伝説によれば、かつてあった大きな沼に、2匹の蛇龍が棲んでいたという⁴⁰⁾。

龍の棲み処を地下への連絡路や森や山に結びつけている伝説は、他にも数多くあるが、それらが果たして神話の影響を受けているのかどうかを判断することは難しい。しかし様々なタイプの伝承において、龍の居場所がエリアーデの語る「あの世」とかかわっているという事実は、ヨーロッパで龍が一種霊的な生き物だとされていたことの証だといえよう（むろんこれはヨーロッパ以外の地域でも同様であるかもしれない）。それゆえに、ヨーロッパの神話における龍退治の冒険を異界への旅ととらえ、勇者が「死と再生」を経験する物語である、と解釈することもできるだろう。

ではここであらためて、龍に飲み込まれるイアソンの図像を、通過儀礼に位置づけてとらえてみよう。そもそもイアソンの冒険は、彼が現王を殺す、つまりペリアスの王位を危うくすると予言されたため、王から遠ざけるために課された難題を達成しようとする物語である。この物語について、リチャード・ハンターは「イアソンの物語は、若者がその正統な相続権を要求する前に恐ろしい難問を達成しなければならないという、ありふれた『イニシエーション的冒険』のパターンにあてはまる⁴¹⁾」と語っている。

実際彼の冒険に「分離、移行、統合」の図式をあてはめるならば、「船出、難題の達成と金羊毛皮の入手、王位の相続」ということになるであろう⁴²⁾。そして彼が龍に飲み込まれるというのは、ジュネップのいう「移行期」における最大の危機であり、クライマックスである。また彼が「異界」へとおもむき、龍に飲み込まれてまたそこから出てくる様は、シャーマンたちの不思議なイニシエーション体験と軌を一にするものなのである。それゆえ、この紀元前の「飲み込む龍」の図像が示す意味は、イアソンが「飲み込まれる」ことによって死を経験し、また新しい肉体を得てその口から吐き出されたということに他ならない。そうすることでイアソンは、はじめて王位継承者としての地位を認められることになるのである。

それでは、フィン・マク・クウイルの龍退治も同様に通過儀礼として見る事が可能であろうか。フィンもイアソンと同様、龍に飲み込まれた後、そのなかから出てきたことになっているが、これは彼の「死と再生」を暗示しているといえよう。マイヤーによれば、「フィン自身はもっとも古い伝承において戦士であるとともに、予言者「視霊者」や詩人にも関連していた⁴³⁾」という。つまりフィンは元来、異界とも接点を持つ人物であったわけである。したがって彼が龍に飲み込まれるという話は、おそらくその冒険行のなかでも最大のクライマック

スを示すものであったと考えられるが、それは彼がかかわった何らかの通過儀礼における「移行期」を示すものであったのかもしれない。しかしここではそれを証明する方法がないので、これ以上の解釈を進めることは断念せざるをえない。

だがマイアーはフィンを北方の英雄シグルドとも関連させているので、ここでシグルドの龍退治のことにも少し触れておきたい。『韻文エツダ』で語られている龍退治の内容を詳しく観察してみると、そこには通過儀礼と見なせる点が存在するからである。まず、シグルドが宝を守る龍ファーフニルを退治するくだりでは、以下のように語られている。

シグルドとレギン [彼を育てた小人] はグニタ荒野へとおもむいたが、そこで彼らはファーフニルが水のなかに潜ったところの痕跡を見つけた。シグルドは道に大きな穴を掘って、そのなかに入った。ファーフニルが黄金のもとを離れて這い出てきたとき、シュッシュと毒の息をはきだしたが、それはシグルドの頭まで下りてきた。そしてファーフニルがその穴の上を通りかかるや、シグルドは彼の剣を心臓に達するまで突き刺した。ファーフニルは震えあがって、その頭と尻尾を激しく動かした。シグルドは穴から飛び上がり、両者は互いに見つめ合った⁴⁴⁾。

ここではシグルドが「穴」を掘って、その上を通った龍の心臓を突き刺している。もちろん柔らかい龍の腹は弱点とされているので、下から刺し殺すのは合理的な発想である。だが「穴」という語は、ゲルマン人の地下世界への信仰という背景もあわせて考えれば、当然「暗い、死、冥界」というコードを含んでおり、それらはまた龍の体内の様子にもあてはまるものである。したがってシグルドが穴に入り、そこからまた出てくる場面は、龍が彼を飲み込んだことを暗示していると解釈することもできる。

またレギンという小人は——シグルドを己の野望のために利用したと語られてはいるが——自分の弟子を立派に育てあげ、さらに龍のところまで連れて行って倒すようしむけている。龍退治はいわばレギンによる教練の総仕上げであり、これによってシグルドは「死」を経験し、さらに鳥の言葉が理解できるという超能力を持った人物となって「再生」するのである。

なお、鳥の声に関してエリアーデはきわめて興味深いことを語っている。

世界中において、動物の、とくに鳥の言葉を学ぶということは、自然の秘密を知ること、したがって予言できるようになることに等しい。鳥の言葉は、ふつうは蛇か、その他の魔術的とされる動物を食べることによって得られる。これらの動物たちは未

来の秘密を明らかにすることができるが、なぜなら彼らは、死者の魂や顕現する神々の受け入れ場所であると考えられているからである。彼らの声を真似することによって、その言葉を学ぶということは、あの世や天との交信を可能にするに等しいのである⁴⁵⁾。

『韻文エッダ』において、シグルドは龍の血をなめて鳥の言葉を理解することができるようになるが、鳥の言葉がわかるということは、彼があゝの世の声を聞く手段を手に入れたということなのだ。つまりシグルドは普通の若者というカテゴリーから「分離」され、龍退治という「移行期間」を経て、予言者という新しいカテゴリーに「統合」されたのである。したがって彼の龍退治もまた立派な通過儀礼であったと見なされる。

このように上記の英雄伝は、いずれも通過儀礼的な意味合いを持っている。そして彼らの通過儀礼の中心をなすのは「飲み込む龍」であり、この点において英雄伝におけるイニシエーションはシャーマンや南方のイニシエーションと類似している。「飲み込む龍」は、英雄を「死」の状態に陥れ、また「再生」させるために必要な「移行期間」を構成しているのである。

IV-2. 聖人の図像や伝承における「飲み込む龍」と通過儀礼

ここまで龍に飲み込まれる英雄の図像や伝承に対して使った分析の方法は、聖女マルガレタの不思議な図像を読み解く上で十分に役立つものである。

聖女マルガレタは、龍の口から出るイアソンと異なって、フィン・マク・クウィルのように怪物の胴体を突き破って上半身を出している。『黄金聖人伝』に書かれた内容から判断して、彼女の図像はこう解釈することができる：マルガレタが地方の「異教徒」によって逮捕されたとき、彼女は一般の少女というカテゴリーから「分離」された。そして彼女は体を引き裂くような拷問を耐えるという「移行期間」に差し掛かるが、このときの頂点をなすのはやはり牢獄で現れる龍である。そしてそのなかから出てくることによって彼女は再生し、聖人のカテゴリーに「統合」される。『黄金聖人伝』の著者は、(マルガレタにかかわる)「飲み込む龍」のモチーフは信頼できないものと決めつけているが、古代の通過儀礼的な英雄伝に慣れ親しんできた人びとにとって、「飲み込む龍」による彼女の「死と再生」ははずせないものだったのかもしれない。

だがマルガレタに関連してさらに興味深いのは、彼女が出産の守護聖人に位置づけられていることである⁴⁶⁾。

出産という視点から彼女の図像をよく観察すると、まるで龍がマルガレタを出産しているよ

うに表現されていることがわかる。龍の「傷口」からは血が流れているが、それは単に龍の負傷による血というだけではなく、出産にともなう血でもあると解釈できる。したがって、マルガレタの存在価値は龍に飲み込まれるという話があってはじめて成り立つのであり、彼女を出産の守護聖人として位置づけることが可能になるのである。またこの図像において、龍は殺す者であると同時に母体そのものでもあることが確かめられる⁴⁷⁾。これに関して興味深いことに、フランシス・ハックスリーは、マルガレタと龍の図像と、インドのムガールで描かれた様々な生き物から成り立つ動物（頭部だけは人間の女性）の彩色画とを同時にとりあげている。彼は、もしマルガレタと龍が組み合わされるならば、このインドの動物のように、「捕食者、被食者をとわず、すべて〔の動物〕を生み出す女神のように見える」⁴⁸⁾と語っている。

また『黄金聖人伝』における聖シルヴェステルの龍退治の物語も、広い意味での通過儀礼に位置づけて考えることができる。この話ではシルヴェステルは龍に飲み込まれるのではなく、異界の入り口を象徴するその口を縛ってしまう。しかし上述したように彼の祭日は大晦日（ジルヴェスター）であり、この日には、人びとは新しい年へと入ってゆく準備をしなければならない。大晦日はまさしく通過儀礼における「移行期間」なのであって、この期間に人びとは自然とともに象徴的な死を迎え、また再生する。このような視点からシルヴェステルの話を読むと、ヨーロッパの人びとが、おそらくキリスト教化される以前から、大晦日を通過儀礼的な祭日と定め、祝ってきたことがしのばれるのである。

ただ、聖人や聖女の伝承にかかわる「飲み込む龍」のモチーフは、古代ヨーロッパの神話におけるそれとは少しコンテクストが異なることを忘れてはならない。彼らの伝承に登場する「飲み込む龍」は、「死と再生」をもたらす霊的存在ではなくて、恐るべき悪魔なのである。よくいわれるように、キリスト教のシンボリズムにおいて龍は罪と悪魔の象徴であり、さらに「異教」のシンボルでもあったからだ。レーリッヒはこう語る。

比喩的な意味において、龍に対する勝利は異教と罪に対する勝利を意味する。これはマルスの祭壇の下にいる龍を追い払う聖フィリップス、神として崇められている龍を十字架の旗で殺す聖フローレンティウス、ジュピターの神殿の廃墟に棲んでいる龍を打ち負かすキリキアの聖ジュリアンなどの伝説において明らかである〔マルスもジュピターも、ともに古代ローマの神である〕⁴⁹⁾。

このように、キリスト教化以前に信仰されていた神々は、龍と関連づけて語られるようになった。キリスト教では、死者を再生させることができるのは唯一神に限られているため、

「異教」の神々、すなわち龍を信仰するということは二重の「死」を意味する。そのうちのひとつは、人間がいずれ迎える一般的な「死」であり、もうひとつは、永遠に蘇ることのできないという「死」である。したがって、キリスト教のシンボリズムにおける龍は、永久に復活のきっかけを与えなくする真に恐ろしい怪物となるのである。またキリスト教においては、龍が体現するのはケルト人やゲルマン人の思い描いていた地下世界とはやや異なる「地獄」であった。そしてその怪物の口から人びとを救えるのは、イエス・キリストただ一人とされている(図6)。

聖人の伝承や図像は、こうしたキリスト教の教えも理解した上で解釈を進めなければならない。だがそれにもかかわらず、マルガレタの対峙する「飲み込む龍」は「死と再生」を与える役目を持っている点が特殊であるといえよう。もしかすると、『黄金聖人伝』の著者にはこのことが気に入らなかったのかもしれない。



図6：怪物の口にいる人びとへ手をのばすキリスト
中世後期ドイツの聖歌集より

IV-3. 「死と再生」の象徴としての「飲み込む龍」

このように「飲み込む龍」のかかわる図像や伝承を、通過儀礼という視点から分析することによって、ひとつ明らかになったことがある。それは「飲み込む龍」が、通過儀礼的物語にお

ける「移行期間」を象徴していることである。英雄や聖人はこの「移行期間」を通過することによって、初めて彼らのイニシエーションを終えることができた。

死後の再生を信じるケルトやゲルマン人にとって、地下世界への通路は一方通行ではなく、そこからまた戻ってくることもできた。それゆえフィンやシグルドの冒険に登場する「飲み込む龍」は、彼らにイニシエーションにおける「死と再生」の機会を与える霊的な動物というだけでなく、死者の滞在する地下世界そのもの、すなわち「死」そのものであったともいえる⁵⁰⁾。そういう意味で龍の口は「冥界のライン」と呼ぶことができよう。このラインを越えて飲み込まれば、それは「死」であり、このラインを通過してまた出てくればそれは「生」となる。

古代ギリシア人に関しては、「死と再生」に対する信仰はケルト人ほどには強調されないが、その神話においてメディアが羊を大釜で蘇らせることから明らかなように、彼らも再生の物語と全く無縁ではなかった。したがってイアソンの冒険行に登場する龍に「死と再生」の意味を見出すことは可能なのである。

そしてまたギリシア神話では、龍の歯を使って地中から人間を呼び出すというモチーフも現れる。これがカドモスの冒険で語られていることはすでに述べたが、イアソンの冒険でも、彼の受けた試練のひとつとして語られている⁵¹⁾。龍の歯を播くことで、人間が地中から出てくるというモチーフは、この怪物が人を殺すだけでなく生み出す存在でもあったことを示しているといえるだろう。

こうした「飲み込む龍」の性格は、ヨーロッパ以外の地域にも見出せるものである。もともと龍は、オリエントの古代文明で創作された動物だとする説があるが⁵²⁾、この地域でも「飲み込む龍」のモチーフは人びとにとって馴染み深いものであった。

メソポタミアの神話では、世界が創られて天と地が分かれた後は、ティアマトとアプスーという2人の存在しかいなかったという。女性のティアマトは海、男性のアプスーは地下の水を具現化した者であったが、アプスーは彼らの子供のひとりによって殺害されてしまう。これに怒ったティアマトは、恐ろしい蛇龍となって子供の子孫に襲い掛かるが、その一人のマルドゥクが「彼女の頭蓋を鎚^{つちほこ}で打ち砕くことによって」⁵³⁾ 殺される。この神話では、マルドゥクは死をもたらず存在を克服する者として描かれているのであるが、ルルカーの示した話によれば「神的な英雄 [マルドゥク] は水の怪物 [ティアマト] の体に入り込み、それを内側から殺して無傷で再び出てくる」⁵⁴⁾ という。マルドゥクが怪物（母神）のなかに入り込んでそこから出てくる過程は、彼の「死と再生」をともしなう通過儀礼でもあるといえよう。

こうした例が示しているように、「死と再生」をあらわす「飲み込む龍」のモチーフは、

世界中でまだまだ見出せる可能性を秘めている。ただ龍の性格は、同じヨーロッパの地域でもキリスト教化以前と以後で若干異なるように、時代ごとの死生観や、地域ごとの宗教観などによって常に流動するものだという事、意識しておかねばならないだろう。

おわりに

ふだん「龍退治」の物語と聞けば、想像されるのは龍に向かって敢然と立ち向かおうとする英雄や聖人たちである。龍退治は冒険物語のハイライトであるが、たいていの場合、龍は英雄の偉業を飾り立てるファンタジックな動物にすぎない。

だがその一方で、主人公が龍に飲み込まれてしまうという風変わりな伝承群も存在し、イアソンや聖女マルガレタにいたっては、龍の体内から姿を見せる異様な姿で描かれている。これもただ表面だけ眺めていては、そこに秘められた意味を読み解くことは難しい。こうした「飲み込む龍」のモチーフを、世界各地に見られる「飲み込む動物」がかかわるイニシエーションと比較したり、ジュネップの「分離、移行、統合」という通過儀礼の図式をあてはめたりすることによって、はじめてそこに隠された「死と再生」にまつわる意味を読みとることができるのである。

ヨーロッパの各時代の「飲み込む龍」の意味は、その時どきの死生観や宗教観によって異なっている。古代ヨーロッパにおいては、イアソンやフィンやシグルドが対面する龍は、彼らに「死と再生」のきっかけを与える霊的存在であり、死者が復活のときを待つ地下世界の象徴でもあった。だがキリスト教化の後、龍は人間を破滅させる罪や悪魔を体現する存在とされ、決定的にネガティブな意味を付与されている。

だが興味深いのは、たとえ時代や地域が異なっても「飲み込む龍」の話が再三語られていることであろう。この事実からは、二つの解釈が示唆される。ひとつは、古代に起因する「飲み込む龍」のモチーフは、いく度も命を吹き込まれ、「再生」を繰り返すことで命脈を保ってきたという解釈である。そしてもうひとつは、いかなる時代、いかなる地域においても、人びとは様々な形で「飲み込む龍」に対面するのかもしれないという解釈である。

「飲み込む動物」が人間一般にかかわっているという興味深い事実は、シャーマン研究者のヴィテプスキーが彼の著書で示している。彼は、大蛇によって自分が食べられるという病的な幻覚をいただいている、ある現代人の描いた絵を紹介したのである⁵⁵⁾。

時代をとおして語られてきた「飲み込む龍」のモチーフは——それが通過儀礼的意味を有するがゆえに——人が人生において遭遇する様々な危機に重ねることも可能である。人は危機を克服することによって、通過点を乗り越えることによって、強い人格を備えるといった

新しい状態に「統合」されるのである。だが「飲み込む龍」を避け続けるならば、いつまでも今の状態にとどまらざるをえない。そうした意味からも、古代や中世ヨーロッパの「飲み込む龍」の図像は、多くの社会問題に直面する我々にもリアリティを持つ、身近なメッセージを投げかけているのではないだろうか。 (準研究員 文学研究科博士課程後期課程)

図版出典一覧

- 図1 : Huxley, Francis: *The Dragon*. London: Thames and Hudson, 1979, p. 68.
 図2 : Huxley 1979, p. 52.
 図3 : 利倉隆: 『悪魔と美術の物語』、美術出版社、1999年、106ページ。
 図4 : Huxley 1979, p. 69.
 図5 : 柳宗玄、遠藤紀勝: 『幻のケルト人——ヨーロッパ先住民の神秘と謎』、社会思想社、1994年、64ページ。
 図6 : Möbius, Friedrich & Scieurie, Helga (edit.): *Geschichte der deutschen Kunst, 1200-1350*. Leipzig: VEB E. A. Seemann Verlag, 1989, 図 279.

注

- 1) Genep, Arnold van: *The Rites of Passage*. London: The University of Chicago Press, 1960, pp. 10-11参照。
 - 2) Nobeck, Edward: *Passage Rites, The New Encyclopedia Britannica in 30 Volumes*. Chicago, 1980, p. 1045.
 - 3) Genep 1960, pp. 3-4.
 - 4) Nobeck 1980, p. 1045 参照。
 - 5) Apollodorus: *The library of Greek mythology*. Oxford: Oxford University Press, 1997, p. 100.
 - 6) The Poetic Edda: *The Poetic Edda*. New York: 1996, p. 157-165 参照。
 - 7) Lindow, John: *Norse Mythology: A Guide to the Gods, Heroes, Rituals, and Beliefs*. New York: Oxford university press, 2001, p. 288 参照。
 - 8) Das Nibelungen Lied: *Das Nibelungen Lied*. Berlin: Verlag der Nation, 1957, p. 33.
 - 9) Röhrich, Lutz : Drache, Drachenkampf, Drachentöter, *Enzyklopädie des Märchens, Handwörterbuch zur histor. u. vergleichenden Erzählforschung*, Band3. Berlin: de. Gruyter, 1981, p. 797.
 - 10) Röhrich 1981, p. 795 参照。
 - 11) Voragine, Jacobus de: *The Golden Legend*, Volume 1. Princeton: Princeton University Press , 1993, p. 239.
 - 12) Voragine 1993, Vol. 2, pp. 23-24 参照。
 - 13) Voragine 1993, Vol. 1, p. 70.
 - 14) Apollodorus 1997, pp. 48-54 参照。
 - 15) Apollonius of Rhodes: *Jason and The Golden Fleece. (The Argonautica)*. Oxford: Oxford University Press, 1995, p. 102 参照。
 - 16) Hard, Robin: *The Routledge Handbook of Greek Mythology*. London: Routledge, 2004, p. 392.
 - 17) 竹原威滋、丸山顯徳編: 『世界の龍の話』、三弥井書店、1998年、144ページ。
- これらの伝承は、アアルネ・トンプソン (AT) の話形 2028「切り開かれたトロル (もしくは狼)」に類似した話でもある。この話形は、動物や怪物に飲み込まれた主人公が腹を突き破って出てくるというもので

ある。

- Aarne, Antti & Thompson, Stith: *The Types of the Folktale, A classification and bibliography*. Helsinki: Academia Scientiarum Fennica, 1964, p. 528 参照。
- 18) Meier, Bernhard: Finn Mac Cumail, *Lexikon der keltischen Religion und Kultur*, Stuttgart: Alfred Kröner Verlag, 1994, p. 128 参照。
- 19) Voragine 1993, Vol. 1, p. 369.
- 20) Farmer, David Hugh: Margaret of Antioch, *The Oxford Dictionary of Saints*. Oxford: Oxford University Press, 1987, p. 282.
- 21) Die Bibel: *Die Bibel, oder die ganze heilige Schrift des alten und neuen Testaments nach der deutschen Überlieferung D. Martin Luthers*. Berlin: Britische und Ausländische Bibelgesellschaft, 1922. Der Prophet Jona 1, 1-2, 11.
- 22) Huxley 1979, p. 69.
- 23) Eliade, Mircea: *Shamanism, Archaic Techniques of Ecstasy*. Princeton: Princeton University Press, 1974, p. 36.
- 24) Eliade 1974, p. 59.
- 25) Gennep 1960, pp. 108-109 参照。
- 26) Lurker, Manfred: *Symbol Mythos und Legende in der Kunst, die symbolische Aussage in Malerei, Plastik und Architektur*. BadenBaden: Verlag Valentin Koerner, 1974, p. 69.
- 27) Jan De Vries: *Keltische Religion*. Stuttgart: W. Kohlhammer Verlag, 1961, pp. 249-250.
- 28) James, Simon: *The World of the Celts*. London: Thames & Hudson, 1993, p. 89.
- 29) マイアーは「汎ゲルマン的に、死者の地下世界における滞在に関する考え方が現れているが、それが[当時]すでに埋葬をおこなわせるにいたったのだ。この地下の死者の世界に関するゲルマン語の名称は halja といい（ドイツ語の hehlen <隠す>、古代アイルランド語の cuile <地下室>と同系である）、それはゴート語の halja、古英語の hel、古ザクセン語の hellia、古高ドイツ語の helle、そして古ノルド語の hel などの個々の相当語にも読みとれる。そもそもこうした語によって刑罰の場がイメージされていなかったことは、ゴート語の聖書における言語の使用が示しているとおりであり、この書は halja という自国の言葉のかたわらに、キリスト教的な意味における <地獄> という表現のために、外来語の gaiainna（ギリシア語の géenna）を用いている」と述べている。
- Maier, Bernhard: *Die Religion der Germanen*. München: C. H. Beck, 2003, p. 108.
- 30) Vitebsky, Piers: *The Shaman*. London: Duncan Baird Publishers. 2001, p. 60.
- 31) 中野節子（訳）：『マビノギオン：中世ウェールズ幻想物語集』、JULA 出版局、2000年、71ページ。
- 32) Apollodorus 1997, p. 57 参照。
- 33) Röhrich, Lutz: *Märchen und Wirklichkeit*. Wiesbaden: Franz Steiner Verlag, 1979, p. 68.
- 34) 柳、遠藤 1994年、65ページ 参照。
- 35) Walker, Barbara G.: *The woman's encyclopedia of myth and secrets*. New York: Harper Collins Publishers, 1983, p. 151 参照。
- 36) Die Bibel 1922, Matthäus 12, 40.
- 37) Eliade 1974, p. 94.
- 38) Eliade 1974, p. 94.
- 39) Rölleke, Heinz: *Das große deutsche Sagenbuch*. Düsseldorf: Patmos Verlag, 2001, p. 411.
- 40) Rölleke 2001, p. 528 参照。
- 41) Hunter, Richard: Introduction (Apollonius 1995), p. xx.

- 42) もっともイアソンはその後、人びとに追い出されてしまい、王位継承はならなかった。
- 43) Meier 1994, p. 128.
- 44) The Poetic Edda 1996, p. 157.
- 45) Eliade 1974, p. 98.
- 46) Huxley, p. 52 参照。
- 47) ちなみにウォーカーは、聖女マルガレタは「架空の『処女殉教者』で、キリスト教徒としては決して存在しなかったのであり、アフロディテ・マリナ、ペラギア、もしくは海の真珠と呼ばれたマルガリタの列聖された姿であった。」とし、その出自が「異教」の出産の女神であったと述べている。
Walker 1983, p. 582.
またファーマーによれば、「イングランドやその他の地域で大変ポピュラーであったが、マルガレタは歴史的人物としては決して存在しなかったらしく、宗教上のフィクションにおけるキャラクターにすぎなかった。… [中略] …彼女の崇拜は1969年に教皇によって抑えられた」という。
Farmer 1987, pp. 281-282.
- 48) Huxley 1979, p. 53.
- 49) Röhrich 1981, p. 796.
- 50) もっとも、アクセル・オルリクは「飲み込む怪物」のモチーフに関し、これに似た解釈を示している。
Rumpf, Marianne: Fressermärchen, *Enzyklopädie des Märchens, Handwörterbuch zur histor. u. vergleichenden Erzählforschung*, Band5. Berlin: de. Gruyter, 1981, pp. 260-261 参照。
- 51) Apollodorus 1997, p. 54 参照。
- 52) Röhrich 1981, p. 802 参照。
- 53) Black, Jeremy & Green Anthony: *Gods, Demons and Symbols of Ancient Mesopotamia, An Illustrated Dictionary*. Austin: University of Texas Press, 2003, p. 177.
- 54) Lurker 1974, p. 68.
- 55) Vitebsky 2001, pp. 128-129 参照。